

## 資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1995-09
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008497">http://hdl.handle.net/2344/00008497</a>

# 「資料紹介」

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

口述・アマン／構成・V.L.バー  
ンズ&J.ボディ 裸のアマ  
ン—ソマリ人少女の物語 東京  
早川書房 1995年 306p.



これは、あるソマリ人の少女アマンが、17歳の時に1969年の無血クーデター後の混乱のなかソマリアを脱出し、タンザニアにたどりつくところまでを語った本である。アメリカ人の人類学者であるバーンズがアメリカでアマンと出会ったのが、この本の生まれるきっかけとなった。バーンズの死後、ボディが編集を引継ぎ、出版に至る。

下手をすれば「あるソマリ人少女の告白」に堕しかねない話を、人類学者の目を通してアマンの物語が再構成されているだけに、ソマリ社会を生き生きと伝えてくれる「ノンフィクション」へと昇華させている。

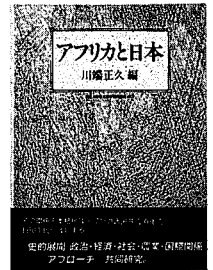
この物語は伝統的社会に生きる典型的な一ソマリ少女のお話などではない。イタリア人のボーイフレンドをつかって村中から白い目で見られたり、13歳で勝手に結婚を決めた挙げ句怖くなって逃げだしたり、首都モガディシオへと家出したり、どう考えても村の問題児である。

しかし、その彼女の行動に反発する周りの人々の反応から、ソマリの伝統社会が西洋文化との接触により揺れ動く様子が伝わってくる。問題を解決するために乗り出す族長、彼女を陰でシャルムート(娼婦)と呼ぶ村人たち、破天荒な彼女の行動を助ける友人たち、そして彼女の行動に心を痛めながらもアマンの稼ぎに頼ることになる家族。ここには単なる対立の構図があるのではなく、異端児アマンを追放せずに、(後ろ指を差しながらも)存在を許容するソマリ社会の柔軟性も感じられる。

また、アマン自身の中にも伝統が息づいているのが興味深い。激痛を伴い下手をすれば生命にも関わる割礼に誇らしさを覚え擁護するし、自分が処女であることを誇りを持って親族の前で示す場面などは、圧巻ともいえる。

詩人と呼ばれるソマリ人の彼女の口述であり、忠実に事実を叙述しているかはさておき、内戦や飢餓などでくられてしまいがちなソマリアの別の(または真の)生活が躍動感をもって綴られた本である。(児玉由佳)

川端正久編 アフリカと日  
本(龍谷大学社会科学研  
究書XXV)東京 勁草書房  
1994年 307P.



龍谷大学社会科学研究所は1991～93年に、「日本・アフリカ関係の史的展開に政治・経済・社会・文化・農業・国際関係などの各方面からアプローチすること」(まえばがき)を目的とする共同研究「日本・アフリカ関係の諸問題」を実施した。本書には、同研究会の(1)共同研究者の研究論文、(2)共同研究会で発表された報告論文、(3)編集企画に賛同した研究者からの寄稿論文が、収められている。「アフリカ観と日本観」「日本のアフリカ外交」「アフリカ経済と日本の協力」「日本のODAとアフリカ」「アフリカ・日本の民際関係」の五つの課題に整理されて収録されている論文は合計18本に及び、また巻末には「アフリカ・日本関係文献目録」が添付されている。

明治時代の「アフリカらしきもの」を扱った小説、日本の大学生の対アフリカ観、現在のODA、NGO、PKO、さらには商社活動に至るまで、本書のカバーする分野とその時間的・空間的守備範囲は広大である。本書は主として国際政治・経済協力の側面からアフリカに関心を抱いている読者のさまざまなニーズに答える書物であろう。

ただし、「アフリカ・日本関係を総合的・多面的に論じた」(まえばがき)がゆえに、本書は焦点が拡散してしまった印象を免れないのも事実である。編者による「序論」あるいは「結論」がなく、18本の論文で各執筆者がそれぞれ異なる方向に向かってメッセージを発信しているように見える。あたかも「弱点」と見まがうこの点にこそ、本書の統一的な主張が秘められているのではなからうか。すなわち、アフリカに対して一面的な認識を持つことの危うさを伝えることが、本書の意図である。一見乱反射しているように見える諸論文から、アフリカとの多様な接触の必要性が読みとられれば、本書の目論見は成功したといえよう。(池野 旬)

中原精一著 南アフリカ憲法  
略史—アパルトヘイトから人  
種協調の歴史へ— 岐阜 朝  
日大学法制研究所 叢書第3  
号 1995年 218p.



1993年制定の暫定憲法に基づき翌94年4月に実施された制憲議会選挙により、新生南アフリカが誕生した。新政権は暫定憲法の規定に従い2年以内に新憲法を策定する作業を、C・ラマボサANC書記長を議長として現在進めている。

本書は、一貫してアフリカ憲法の研究に打ち込んできた著者が、南アフリカ憲法の変遷を追い、憲法の視点から南アフリカにアパルトヘイトが起こった原因、その展開と崩壊の過程を明らかにした労作である。

構成は、93年以前の南ア憲法を「アパルトヘイトの影の基本法」として捉え、その発展の概略を述べた序章に続き、第2章「南ア憲法前史—アパルトヘイト体制の胚胎期」、第3章「1909年憲法—アパルトヘイト法と憲法論争」、第4章「1961年憲法—アフリカーナーと議会主権」、第5章「1981年憲法—大アパルトヘイトと三院制」、第6章「1993年暫定憲法—新憲法史のはじまり」、終章「総選挙とこれから—カオスからコスモスへ」、の7章から成る。各章で各々の憲法の内容を紹介し、その特徴を指摘するとともに、1909年憲法以来人権条項が欠落していたことと、議会がアパルトヘイト法を制定することを許す議会主権の在り方が、南アフリカにアパルトヘイト体制を確立させた主要要因であるとしている。また、アパルトヘイト体制の崩壊の始まりを、ボータ政権下の非常事態宣言の発令と反体制運動の弾圧、それに対する国際社会の経済制裁の強化と見る「通説」に対し、それよりも早い76年のソウェト蜂起とその後の憲法見直し作業の開始とする新しい憲法史上からの視点を提示している。以上のレビューを踏まえ、南ア憲法史上初めて全人種が参加して制定した93年の暫定憲法を高く評価し、今後の南アフリカの民主化を展望している。

(林 晃史)

川田順造著 アフリカの心と  
かたち 東京 岩崎美術社  
1995年 314p.



私は本書を読んでからはじめて、ハービー・ハンコックが1973年に発表したアルバム「ヘッド・ハンターズ」のジャケットの意味が理解できた。アフリカのみやげ物屋でよく見かけるあの丸顔に角の生えた仮面は、ゴリ・プレプレと呼ばれ、西アフリカの部族パウレの儀礼において特定の意味を担って用いられ、さらに北方の部族マリンケからもたらされた歴史を持つという。

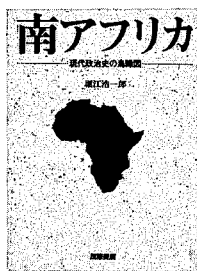
本書は、屈指のアフリカニストである筆者がこれまでに発表してきた、「旧来の用語でいえば『美術』や『工芸』」（あとがき）と呼ばれる分野に関する論考をまとめたものである。衣服、仮面、住居、道具、などいづれもアフリカの日常生活に必要な「もの」が主題として取り上げられている。各論考が発表された時期は1960年代から90年代におよんでいるが、「もの」との関わりを通じてアフリカの人々の暮らしに迫ろうとする筆者の姿勢は一貫しており、違和感なく全体を読み通すことができる。

本書は、アフリカで何となく目にしている「もの」が、実は広大な文化的背景と深い歴史に裏打ちされているのだという、考えてみれば当たり前の事実が気づかせてくれる。文中でさりげなく紹介される、「もの」の意味と歴史は、アフリカを見るわれわれの視野をぐんと広げることだろう。

前述のハンコック、そしてあまりにも有名なピカソの例など、アフリカの「美術」「工芸」は欧米文化に様々な形で影響を与えてきた。しかし、影響を与えたとはいえ、それはあくまでも欧米文化の文脈に位置づけられたということではなかった。そうした文脈から離れて、それが元来アフリカでいかなる意味と歴史を背負ってきたのかを認識することは、アフリカ文化の理解のみならず、欧米文化を相対化して考えるためにも重要な作業であろう。その意味で、地域的な枠を越えた懐の深い本だと思う。

(武内進一)

堀江浩一郎著 南アフリカ—  
現代政治史の鳥瞰図 東京  
国際書院 1995年 343p.



現在八千代国際大学で教鞭をとる著者は、1985年から87年まで在南ア日本総領事館（当時）で専門調査員を務めた。本書は、著者が帰国してから後の論文を集めたものである。

著者が滞在していた当時の南アは、統一民主戦線（UDF）が民主化闘争の前面に浮上し、しかも黒人同士の殺戮事件が頻々と起こり始めた頃で、いわばアパルトヘイトの終わりが始まった時代である。情勢が勢いよく変化していく一方で、情報はきわめて限られていた。その難しい絵解きを現地で担当していたのが著者である。UDFを詳しく解説した第1部第2章や、黒人間抗争を扱った同3章は“時代の証言”にも近い。UDFの主体が「問題解決型のコミュニティー団体」であったことや、政治団体による「暴力の管理能力」が鍵を握っていたという指摘は示唆に富む。さらには、黒人の「抵抗の歴史には負の遺産も含まれている」といった苦い認識の上にANCとの微妙な距離感が保たれていて、ANC合法化までの苦しい時代に闘争を支えた民衆やNGOに対する著者のシンパシーが伝わってくる。評者は、合法化された後のANCがUDFの活動家を吸収していった過程についても是非論じてほしかったと思うのだが、望みすぎだろうか。最終章は、国連選挙監視団に参加した経験に基づく1994年総選挙の総括となっている。特に、クワズールー／ナタール州での選挙に関する部分は大変興味深い。著者がいう、国民和解のためにANCが支払った「高価な政治的代償」は、今後の南ア政局を見るうえでひとつの焦点となる。

人名等の日本語表記の仕方が気になる。また「ソウェト暴動」や「騒乱」は、「蜂起」で統一すべきではなかったか。いずれにしても本書の価値は損なわれていない。

(平野克己)

ルイズ・ジレック・アール著 野田文隆訳 往診はサファリの風に乗って—若い女医の診たアフリカ— 東京 清和書房 1994年 372p.

本書は1959年から62年にかけて熱帯病の研究のためタンザニアに渡ったノルウェー人の女医が体験したアフリカ物語である。身の回り品をつめたトランクと医療用具少々、入手可能な薬だけを持ってキリスト教伝道団の求めに応じて村から村へと巡回して風土病の治療に当たることになる。20代の若さ、しかも30年前のアフリカである。

本書には病気、健康に関わる話しか出てこないのだが、この問題が社会生活と精神世界に深く関わる問題であるだけに当時のアフリカ、あるいはアフリカ人の原点を知るのに格好の書といえる。著者は訳者の指導教官なので著者の個性も訳文から読み取れるように思う。

ここでは病気は悪霊が取り憑いて起こるものと考えられている。したがって科学的な根拠に基づく治療を何の説明もなく行なおうとしても失敗に終わってしまう。病人がいても治療にやって来ること自体なかなか難しい。家族や時には部族全体の了解がなければ治療は行なえない。医者への信頼感ができれば患者はどんどん増える。しかし治療の成果が思わしいと認められなければ動けない入院患者でさえも担架に乗せて連れ帰ってしまう。本人の意思も無関係である。治療途中で連れて行かれた患者は重病であれば治るわけもなく死に至る。それも病気のためではなく治療が悪い、医者が魔術をかけたというように理解されるのである。悔しい思いをしたことも度たびであった。

この経験の中から著者は社会的に迫害を受けていたKifafa（「てんかん」を指すスワヒリ語）患者のための治療センターの運営を開始し、帰国後もその活動を支えるために奔走した。現在では多文化間精神医学の専門家として著名である。Working with Dr. Schweitzerは著者の第二作目である。

(鈴木陽子)

ペペテラ著 市ノ瀬敦訳 マ  
 ヨンベ 東京 緑地社 1995  
 年 359p.



記者あとがきによれば、原作の出版は1980年、この年にアンゴラ文学賞を受賞したとある。邦訳の機会にめぐまれなかったせいでもあろうが、これまでにアンゴラの作家はもちろん、アンゴラ文学が語られることも日本では稀であった。多くのアフリカ諸国同様、この国のニュースとしてわれわれに伝えられてきたのは、打ち続く争乱とその災禍のことばかりである。

昨年11月、ザンビアのルサカで続けられてきたアンゴラ人民解放運動(MPLA)とアンゴラ全面独立民族同盟(UNITA)の和平交渉がようやく決着し、両勢力による内戦は文書の上では終結する運びとなった。しかし、61年に植民地解放闘争として始まったアンゴラの戦乱の歴史は楽観を許さない。資源豊富な国土を覆う熱帯雨林を舞台に繰り広げられてきた対立抗争の根はさらに深いところにある。

本書のタイトル「マヨンベ」とは、アンゴラ北部、大西洋まで延びたザイル領により本土と隔てられた飛び地に広がった密林の呼び名。時代はまさにポルトガルに対する解放闘争のさなか、暗い森の中でゲリラ戦を繰り広げるMPLAの兵士たちが主人公である。見えない敵との出口なき闘いが彼らを悩ませ、苦しめた。淡々とした筆の運びは、闘争の本質が兵士たちの戸惑いと不信に投影されていることを暗示する。

この作品を「ゲリラ文学」などと称するのは明らかに誤りである。「語り手は、私、……」で始まる登場人物のモノローグの中で兵士たちの心情が吐露されているが、自らの来歴をまじえた彼らの言葉は、植民地解放という大義や共産主義のイデオロギーでは贖われ得ない妬み、嫉みや相互不信を赤裸々に語っている。階級や部族など出自の相違は、戦闘状況や軍事組織の中で一見、覆い隠されてはいるが、決して払拭されてはいない。アンゴラを象徴する「マヨンベ」に一筋の道をつけるのは容易なことではないのである。

(望月克哉)

木村映子著 おしゃべりなタ  
 ンザニア 東京 東京新聞出  
 版局 1995年 183p.



自ら選んで、外国に長く滞在する人は、それだけで尊敬に値するように思う。ましてそれが、日々ハードルが待ちかまえているような国タンザニアに12年となると、なおさらだ。この本はそんな日本女性の体験記であり、1990～93年に『東京新聞』に連載された。この女性、並々ならぬ強い愛でタンザニアに惚れ込んだ。決して牧歌的だけではない、恐ろしいことやフラストレーションも多い日々だが、それを補って余りある、生きる喜びを教わる。人間関係に最高の価値をおくアフリカの伝統への共感と、アフリカの中でも独自の道を進むタンザニアの魅力が分かちがたく結実した。著者紹介を書いておられるスワヒリ文化のオーソリティー日野舜也氏もカプトを脱ぐスワヒリ語で、日本とタンザニアのかけ橋として奔走する日々。

さり気なくふれているアフリカ要人とのひとときーングギ、アミン、タンザニアの作家たちの一瞬の登場が印象的。イカンガー選手が武器とする「アフリカ人として授かった自然の能力への信頼」は、著者自身をアフリカへ惹きつけている力でもあろう。

豊かな自然もふんだんに描かれる。大コウモリの島、大蛇の住む宮殿の廃墟、チンパンジーの森、フラミンゴの湖など一度は見たいと気をそられる。

全体を流れるよき日本への愛惜。うさぎ追いしふるさとの山、春の小川の原風景を、タンザニアの風景に重ね合わせる。もともと、ことばを通してアフリカへ惹かれていった著者は、日本語への愛着もひとしおで、ムダがなく、歯切れのいい日本語が快い。

本文にはティンガ・ティンガの絵が散りばめられている。その絵を見ていると、ティンガ・ティンガは著者そのものという気がしてくる。その強さ、その大らかさ、そのきまじめさ、そのおかしさ、その哀愁、その上ピリッと唐がらしも効いている。(丹莖靖子)